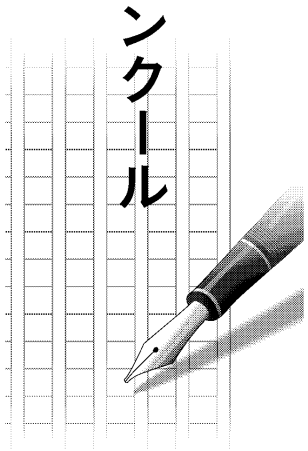
2019年10月08日　本紙　特集　012頁　　(C)神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

第49回 神奈川新聞 文芸コンクール



作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。佳作作品は順次掲載します。

次回は９日の予定

短編小説 佳作①

褒められる人

高橋　美恵　作

たかはし・よしえ　1961年生まれ。会社員。川崎市多摩区

通路の片隅を、老婆が歩行器でゆっくりと移動していく。七月だというのに、施設の中は空調のせいで暑さを感じない。今日からここが母、絹子の住まいになる。快適に過ごせるようにと祈りながら、遥は車椅子を押した。

三十二歳の時に父が亡くなって二十年、遥は結婚もせずに、病弱な母の面倒を看てきた。絹子は遥が幼い頃から、自宅でも臥せっていることが多く、子ども心に寂しい思いをしてきた。それでも美しい母は、遥の誇りだった。

八十歳の絹子は認知症が進み、ついに施設への入所を決めたが、勤めながら母を献身的に介護する娘として、遥は近所の評判もいい。

「人様の目を、いつも気にしないとだめよ。周りに褒められる人になってちょうだい」

幼い頃からずっと、遥は母にそう言い聞かされて育った。母の希望通り、常に褒められる人でありたいと、遥は思う。

あてがわれた部屋に着くと、遥は絹子の車椅子を固定させた。その時、背後に人の気配を感じた。振り向くと、Tシャツにパンツ姿の中年女性が微笑んでおり、遥を見るなり丁寧に頭を下げた。この施設のスタッフだろう。

「今日から、お世話をさせていただきます。担当ヘルパーの森山加奈です」

遥も会釈をして、ヘルパーを見る。ノーメイクの頬に少し乱れた短い髪がかかり、垢抜けない印象だ。次の瞬間、小鼻の横の大きなほくろに気づいた。何故か、見覚えがある。

「久保遥さんですよね？」

突然、名を呼ばれて戸惑う。女性が続けた。

「今は結婚して苗字が森山ですが、小学校の時、同じクラスだった幸田加奈です」

幸田加奈。その時、心臓が大きく鳴った。

同時に、小学五年の時の放課後の教室が、遥の脳裏に蘇る。真ん中で床にしゃがみ込んで、顔を覆って泣いているのは、加奈だ。

他の生徒より身なりがみすぼらしく、そのうえ頭も鈍そうな加奈は、四月のクラス替えの直後から、すぐにいじめの餌食になった。いつも、十人ほどの生徒が加奈を取り囲み、「とろい！」「汚ねえな！」などと、ののしる。

遥はいつも、少し離れたところから、その光景を見ていた。いじめに加担などせず、母の教えを守り、褒められる人でいたかった。

だが、加奈へのいじめを目の当たりにするたびに、遥は握った手の中がじっとりと汗ばんでいくのを感じた。目に見えない気泡が、肌の表面を一斉に走っていく。それは確かに、何度も味わいたくなるような快感だった。

――もっと、もっと見たい――

遥は興奮しながらそっと拳を握りしめ、エスカレートするいじめを静かに堪能していた。

あの加奈が、母の担当のヘルパーになるというのか。どうしよう。思考が止まった。

加奈は、絹子の正面にしゃがみこんだ。痩せた背中は、あの頃を思い出す。一体、どんな表情でいるのか。その時、加奈の声が響く。

「よろしくお願いしますね。絹子さん」

優しい口調で、母に語りかけている。そうだ。遥が自分を毛嫌いし、いじめを喜んで見ていたことなど、加奈が知るわけがなかった。

「なんでも、ご相談くださいね」

絹子と遥を交互に見て、加奈はそう言葉をかけると、会釈をして去っていった。

特に問題もなく、三日が過ぎた。土曜日の昼間に施設を訪れると、絹子は見たこともない黒猫のぬいぐるみを抱いて、ベッドに横たわっていた。手違いで、他の入所者の持ち物が、絹子の部屋に紛れこんだのだと思った。

「お母さん、これ、お返ししないとね」

そう言って取り上げようとすると、絹子は強い力で黒猫を抱きしめ、遥を睨んで訴えた。

「やめて。節子姉さんに、貰ったんだから」

節子とは、絹子が慕っていた優しく美しい姉で、とうに亡くなっている。戸惑っていると、加奈が部屋を訪れて説明をはじめた。

「わたしをお姉様だと、思いこんでいらっしゃるようです。離れるととても寂しいとおっしゃるので、その猫を家で作ってきました」

絹子には、美しい節子と田舎臭い加奈の区別もつかない。だが絹子の病状よりも、丁寧に縫われた黒猫が、遥の心を鋭く射った。

黒猫の刺繍のついたブラウスが、頭に浮かぶ。小学生の頃、加奈がよく着ていたものだ。

そのブラウスをはじめ、当時の加奈は母親のお手製の服や小物を数多く持っていた。貧しくていつも古びた服を着ているくせに、よく見るとお洒落な刺繍やアップリケで、さりげなく修繕がされていた。縫い目一つひとつから、母親の加奈への愛情が伝わってきた。

その手作りの服や小物たちが、あの頃の遥を苛立たせた。絹子が病弱なせいで、遥の家では料理も出来合いのものが多く、手作りの服など、母に作ってもらったことはない。

貧しくて、鈍臭い。そう蔑んできたはずなのに、加奈の服を見るたびに、遥は負けた気分になった。心の底からどす黒いものがこみあげてきて、自分でも持て余すほどだった。

しかも今度は、その母親譲りの手芸の腕で、まるで魔法のように、絹子をあやす。

――もっと、いじめられればいい――

あの頃の思いが鮮やかに蘇り、遥は激しい眩暈を感じた。もちろん、おくびにも出さずに、加奈に縫いぐるみの礼を言った。

「節子姉さん、ねえ、もう怖くない？」

絹子は加奈の手首を掴み、遥を見ようともしない。加奈は、絹子の手を握って話す。

「大丈夫よ。もういじめっ子は、いないから」

遥は驚いて、思わず加奈の横顔を見た。

「子どもの頃、いじめっ子にやられたことを思い出して、最近眠れないようです」

加奈が、静かにそう告げた。まるで自分へのあてつけのようだと、遥は口をつぐむ。

「お歳を召されても苦しむほど、いじめで受けた傷は深いのだと、あらためて思います」

加奈は、噛みしめるように言う。遥は絹子に話しかけて、さりげなく話を逸らした。

その夜、遥は自宅に向かうバスに揺られながら考えた。絹子は認知症だ。万一、加奈に逆恨みされて、危害を加えられたら防げない。

いや、遥は当時いじめに加担していない。絶対に恨まれるはずがないと、自分を宥めた。

気づけば、降りるべきバス停の近くまで来ていた。慌てて降車ボタンを押し、前方へ移動すると、運転手横の料金箱に小銭を入れた。

その時、あることを思い出した。

小学五年生の初夏だったと思う。遥は駅前のバス停で、加奈の母親と一緒になった。母親も加奈にそっくりの鈍そうな顔立ちで、授業参観の時に見かけて、顔を覚えていた。

自宅近くのバス停で降りようとした時、加奈の母も出口に向かった。降車時に料金を払うシステムなのに、財布が見つからないのか、加奈の母は運転手の横で、手提げ袋の中を必死に覗いている。後ろに、人の列ができた。

遥は急いで、大人料金分の小銭を料金箱に入れた。加奈の母は、驚いたように振り向く。

「幸田加奈さんのお母さんですよね？　いいんです。降りてください」

そう言うと、遥は自分の分の料金も支払い、バスを降りるなり走り出した。背後から自分を呼ぶ声が聞こえたが、加奈の母親とこれ以上関わるのは、正直言って面倒くさかった。だから無視をして、家路を急いだ。

夕方、近所の主婦が回覧板を渡しに訪れた。絹子は珍しく長いこと、玄関先で話をしていたが、居間に戻ると弾んだ声で言った。

「褒められちゃったわ。お嬢さん、困っている人を素早く助けて、優しい子ねって」

絹子が、満足そうな微笑みを向ける。どうやらバスでのやり取りを、その主婦に見られていたらしい。よかった。母が褒めてくれた。いつもいい子でいようと、強く思った。

その一件を思い出してから、遥は少し安心した。当時のことはよく覚えていないが、確かあの翌日、加奈と話したように思う。加奈と言い争ったりした記憶はないから、遥の親切は、加奈にも十分伝わったはずだと思った。

数日後、施設を訪ねると、絹子は左手に包帯を巻いていた。そして、忌々しげに言う。

「昨日、あいつにやられたんだよ」

誰かが、母を傷つけた。思わず怒りがこみ上げる。その時、加奈がお茶を配りに現れて、申し訳なさそうに説明をした。施設の食堂で、とある入所者の女性に引っ掻かれたという。

「先方のご家族は、ご存知なんですか？」

遥は思わず、強い口調になった。当事者は認知症だから仕方がないにしても、せめて家族に謝ってもらいたいと思ったのだ。加奈は遥を廊下に連れ出し、言いにくそうに言う。

「絹子さんが、相手の方を挑発したんですよ」

その女性には毎日、夫が面会に来るという。

「激しく、嫉妬したのでしょうね」

加奈の口調は優しいが、絹子は被害者だ。もっと寄り添ってほしい。思わず声を荒げた。

「でも母は、人様に手を出すような人間じゃありません。しかも、そんなことで……」

相手が先に、攻撃したのではないか。そう主張したが、加奈は静かに首を振って続けた。

絹子は日頃から頻繁に、相手の女性について陰口を叩いていたが、確かに本人に直接言ったことは一度もなかったという。ほっとする遥に、加奈は「でも……」と、さらに言う。

「眼差し、なんですよね。いつも嫌悪と軽蔑を込めた眼で、遠くからじっと相手の女性を見ていらしたんです。あんな目で見られたら、どんなに幼い子どもでも悪意に気づきますよ」

絹子の軽蔑の眼差しに苛立って、相手が絹子を引っ掻いたらしい。加奈は真っ直ぐに、遥を見る。責められているのは、絹子ではなく自分ではないかとさえ、思えてくる。

遥の激しい嫉妬と嫌悪に、幼い加奈も気づいていたのか。室内は決して暑くはないはずなのに、遥の背中に這うように汗が流れた。

その日を境に、絹子は遥にも、相手の女性の悪口を言うようになった。夫が毎日面会に来る女性に対して、「男狂い」「はしたない」「いつも貧相な服装のくせに」などと罵る言葉には、地団駄を踏むような激しい嫉妬が滲む。その度に遥は、絹子の傍らの黒猫の視線を感じた。「お前たち親子は、よく似ている」と、ぬいぐるみの黒猫までもが、遥を罵る。

そんなある日、絹子の汗を拭こうとして、遥は気づいた。胸や腕の広い範囲に、細かい掻き傷ができている。慌てて加奈に尋ねると

「最近は、相手の女性のせいで身体中が痒くなるとおっしゃって、掻きむしるんです」

「まるで、幻の敵と戦っているみたいですね」

遥の言葉を、加奈は瞬時に否定した。

「いえ、敵は嫉妬する自分の心ですよね」

加奈の強い口調に、気圧された。おかしい。いつもの優しさが、欠片もない。その上、突き放すようにそれだけ言うと、そそくさと去っていった。ざらついた違和感だけが、残る。

「まさか、加奈が何かをしたんじゃあ……」

心のどこかで、言いがかりだと解っていた。絹子の白い肌には、赤い掻き傷が網目のように走っている。これらがすべて、絹子の醜い感情のせいだとは思いたくなかった。痒がったときに、加奈が力任せに掻いたとか、とにかく、少しでも人のせいであってほしかった。

子どもの頃の加奈は、確かに辛かったはずだ。当時のクラスメイトの母親、それだけで発作的にいじめたくはならないだろうか。

施設内を行き交う他のスタッフにも声をかけ、傷の原因を聞いて回ったが、予想通り、自傷行為以外の答えは得られなかった。

数日後、面会に行くと、廊下で加奈に呼び止められ、相談室という部屋に通された。テーブルを挟んで座ると、加奈が切り出す。

「お母様の自傷行為を、疑っておられると聞きましたが」

呼び止められた時から、用件は解っていた。確かに、証拠はない。あの日、焦って他のスタッフに尋ねたのは軽率だったと、後悔した。

「もしかして、わたしがやったと思っておられますか？　子どもの頃の仕返しに……」

この質問も、予想通りだ。「わたしは当時いじめに関わっていないから、仕返しだなんて思ってない」と答えた。軽蔑した眼差しについて指摘されたら、しらを切るつもりだった。

「ならどうして、自傷行為を疑うの？　それに……全然、覚えてないのね。やっぱり」

加奈が眉をひそめる。眼差しのことだろうと身構えた遥に、加奈は溜息をついて続けた。

「母に無理やり小銭を押しつけて、バス代を肩代わりしてやったと吹聴したでしょう？」

「え、なんのこと？」

あの日の親切を、加奈は悪意と捉えていたのか。意味が解らない。加奈によれば当時、母親は手首を捻挫しており、大きな手提げ袋の底から財布を取り出すのに苦労していた。その隙に、遥が料金を払ってしまったらしい。

すぐに金を返そうとして呼び止めたが、遥に走り去られて、母親は困惑した。その後、加奈は母に頼まれてクラスの集合写真を見せ、遥がバス代を支払ったことを知ったという。

翌日、加奈がお金を返そうとしたが、遥は拒否した。遥がバス代を払ったことがクラスで噂になり、母親が無賃乗車したと言われて、加奈へのいじめはさらに激しくなった。

「あの頃、鈍臭いといじめられたことは、とても辛かったけど我慢できたの。でもね……」

加奈は遥を見据えて、言い放つ。

「必死に働いてわたしを育ててくれた母を蔑むことだけは、絶対に許せなかった」

確かにあの頃、遥は仲のよい友達数人に、バスの件を話した。それが、噂になったのか。

「待って、誤解よ。確かに話したけれど、人助けしたことを、誉めてほしかっただけなの」

遥の言葉を遮って、加奈が言う。

「貧しい子の母親を助けて、誉めてもらいたかったの？　その考えがそもそも、見下しているって思わない？　もし困っていたのが裕福な家の子の母親でも、同じことをした？」

突然、刃物の切っ先を突きつけられた思いがした。ずっと、親切にしたつもりでいたのに。加奈の目が怖い。

「あなたの仕打ちは、一生忘れない。でもね」

加奈は息を深く吸って、静かに言う。

「わたしは絶対に、人をいじめるような人間にはならない。小学生の時に、そう誓ったの。だからわたしは、悪意に負けない。他人の悪意はもちろん、自分の中の悪意にも」

言い終わると、加奈は席を立つ。

「ご安心ください。お母様、責任を持って誠心誠意、介護させていただきますから」

加奈の表情は、自信に満ちていた。去っていく後姿を見送る。加奈の声が耳元で響いた。

――敵は、嫉妬する自分の心ですよね――

すべて、心が作り出したものだというのか。

自分はいつでも、褒められる人のはずだった。それなのに、この敗北感は、なんなのか。

その時、大好きな「節子姉さん」を呼ぶ、絹子の信頼しきった声が、廊下に響いた。

講評

かつてさげすみ嫉妬していた同級生が、老いた母親の担当ヘルパーとなる、というちょっとこわい小説。過去と現在をうまく織り交ぜたミステリー仕立ての構成で、遥と加奈という二人を、じつにうまく描いたと思う。タイトルもいい。

（審査員・角田　光代）

現代詩 佳作②

記憶と水、心

国広　知恵子　作

くにひろ・ちえこ　本名・国広智恵子（くにひろ・ちえこ）　1962年生まれ。会社員。横浜市港北区

透明な水が静かに
心の窪みに溜まっている
手首まで手を入れて
かき回すと
忘れていた記憶が顔を出し
溢れた水が
乾いてひび割れした
薄茶色の心の地面に
細い水跡を作る
遠い昔
走り書きして
心の奥にしまい込んだ
小さな紙の切れ端が現れて
取り出してみたけれど
もう文字は消えていた
心は時と共に流れ
変わりゆく
どこにも
留められない

講評

記憶の曖昧さを、水の意識によって形象化した詩。移り変わってしまう過去の記憶のはかなさを、何とか言葉にしたいとする作者の深い思考が感じられる。出だしの二行がすばらしい。読むたびに魅かれていった作品。

（審査員・金井　雄二）

窪田　こず恵　画